

1 東京都・大阪市中心卸売市場の需給動向(令和5年3月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万1367トン、前年同月比95.1%、価格は1キログラム当たり266円、同99.0%となった。
- 大阪市中心卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万6547トン、前年同月比101.8%、価格は1キログラム当たり237円、同93.3%となった。
- 5月は初夏物が始まり、引き続き前進傾向と報告されている。果菜類も越冬作を中心に気温の変動が大きい中で、生産者の努力によって引き続き大幅な減少もなくピークを迎えるが、豊作ではないと予想される。

(1) 気象概況

上旬は、高気圧に覆われやすく、西高東低の気圧配置となりにくかったため、ほぼ全国的に旬降水量は少なく、旬間日照時間は多かった。特に、東・西日本太平洋側、西日本日本海側、沖縄・奄美では旬降水量がかなり少なく、旬間日照時間がかなり多かった。旬間日照時間平年比は、東日本日本海側で188%、西日本日本海側で176%、東日本太平洋側で140%、西日本太平洋側で158%で、それぞれ1961年の統計開始以降、3月上旬として1位の多照となった。北・東・西日本では、大陸からの寒気の影響を受けにくく、暖かい空気が流れ込んだ日もあったため、旬平均気温はかなり高かった。旬平均気温平年差は、北日本で+3.7℃、東日本は+3.3℃で、それぞれ1946年の統計開始以降で3月上旬として1位の高温となった。旬降水量は、北日本日本海側と北日本太平洋側で少なかった。東日本日本海側では平年並だった。旬間日照時間は、北日本日本海側と北日本太平洋側で多かった。

中旬は、全国的に天気は数日の周期で変わった。旬間日照時間は全国的に多く、特に北・東・西日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多かった。旬降水量は、まとまった雨が降った日があった東日本太平洋側で多かったが、西高東低

の気圧配置となりにくかった北・東・西日本日本海側で少なかった。全国的に南から暖かい空気が流れ込みやすかったため、気温は北・東・西日本でかなり高かった。旬平均気温平年差は北日本で+2.9℃で、1946年の統計開始以降で3月中旬として1位の高温となった。旬降水量は、北・西日本太平洋側では平年並だった。

下旬は、本州南岸に前線が停滞したため、東日本太平洋側から西日本、沖縄・奄美を中心に曇りや雨の日が多かった。南からの暖かい空気が流れ込みやすかったため、全国的に旬平均気温はかなり高く、旬平均気温平年差は、東日本で+3.8℃、西日本で+3.1℃で、1946年の統計開始以降、3月下旬として東日本は1位タイ、西日本は1位の高温となった。旬平均気温は、全国的にかなり高かった。旬降水量は、東・西日本太平洋側で多かった。北・東・西日本日本海側では平年並だった。旬間日照時間は、移動性高気圧に覆われやすく、西高東低の気圧配置となりにくかった北日本日本海側でかなり多く、北日本太平洋側と東日本日本海側で多かった。東・西日本太平洋側で少なかった。西日本日本海側では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側			
東日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側
西日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側

資料:気象庁「3月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は11万1367トン、前年同月比95.1%、価格は1キログラム当たり266円、同99.0%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向 (3月速報)

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	111,367	95.1	90.3	266	99.0	107.4	270	264	263
だいこん	8,895	97.1	86.6	90	82.9	98.0	93	86	91
にんじん	6,188	90.2	92.3	156	144.0	99.5	140	160	167
はくさい	6,677	86.3	83.6	87	107.8	107.1	66	84	116
キャベツ類	17,385	96.3	93.5	85	76.2	91.9	86	86	84
ほうれんそう	1,619	95.1	102.6	418	103.9	106.2	438	381	436
ねぎ	4,103	105.5	102.8	230	73.1	72.0	247	214	229
レタス類	7,027	100.1	92.5	202	95.4	117.1	235	198	176
きゅうり	5,689	92.0	91.2	348	122.1	109.9	394	334	321
なす	2,232	97.3	100.6	371	92.7	86.3	397	363	358
トマト	5,246	88.6	85.8	430	114.8	111.0	406	416	468
ピーマン	2,069	99.1	103.9	698	114.7	114.2	791	733	601
さといも	469	100.7	105.0	287	101.1	94.1	314	286	261
ばれいしょ	6,547	93.4	87.5	149	66.6	90.6	147	147	155
たまねぎ	9,813	107.8	91.1	135	57.9	104.6	134	138	133

資料:東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1:平年比は過去5カ年平均との比較。

注2:豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、徳島産が増量となった中旬以降に価格を上げ、大幅に安かった前年を4割以上上回ったものの、平年をわずかに下回った(図2)。

葉茎菜類は、レタスの価格が、数量が十分であったことから下旬に向けて軟調となり、大幅に高かった前年をやや下回り、平年を2割近く上回った(図3)。

果菜類は、トマトの価格が、小玉傾向であった上中旬から下旬に向けて回復し、やや安めに推移した前年を1割以上上回り、平年を1割強上回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が、大幅に高かった前年を4割以上下回り、平年をやや上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2のとおり。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

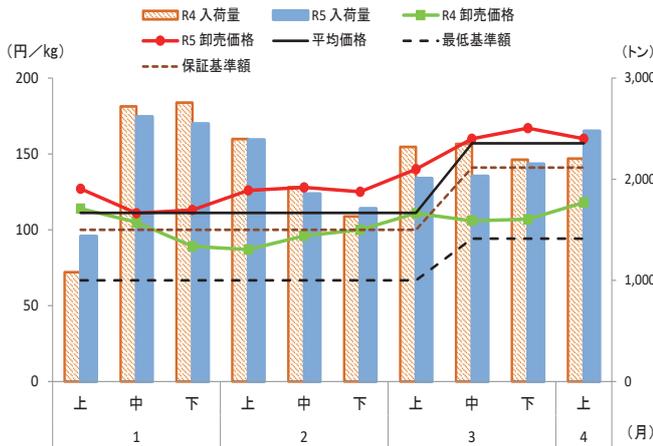


図3 レタスの入荷量と卸売価格の推移

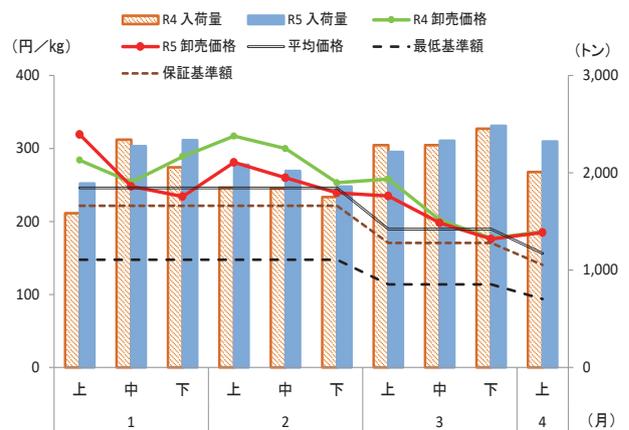


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

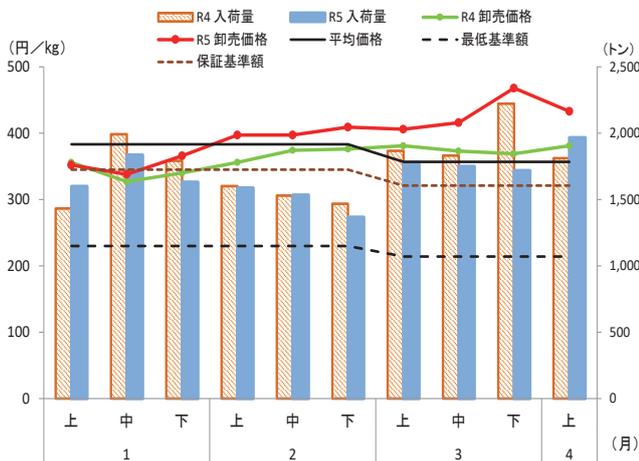
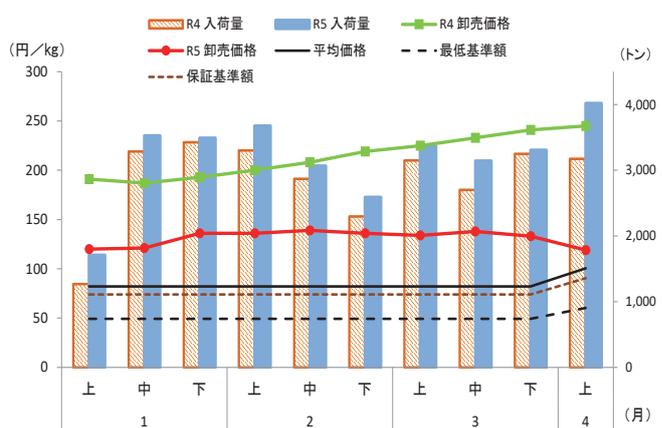


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	3月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	千葉産、神奈川県中心の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、低温・干ばつの影響で遅れていた生育は、気温の上昇と適度な降雨により前年並みまで回復している。神奈川県産の作付面積は前年をやや下回る。シーズン終盤となり、低温・干ばつの影響により遅れていた生育は回復傾向。総入荷量は少なかつた前年をわずかに下回り、平年を1割以上下回った。 価格は月間を通して比較的安定した動きとなり、高めに推移した前年を2割近く下回り、平年をわずかに下回った。
	にんじん 	徳島産、千葉県中心の入荷となった。徳島産の作付面積は前年並みで、寒さの影響もありやや細物傾向。葉の傷みで病害が発生している園地が散見され、ダニなどの虫害も散見される。千葉県産の作付面積は前年並みで、肥大は良好。シーズン後半のため漸減した。総入荷量は平年を1割弱下回り、平年をかなりの程度下回った。 徳島産が増量となった中旬以降に価格を上げ、大幅に安かつた前年を4割以上上回ったものの、平年をわずかに下回った。
葉茎菜類	はくさい 	茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年をやや下回り、年明け以降の干ばつ傾向により生育はやや遅延気味。秋冬作はほぼ中旬で切り上がった。総入荷量は前年を1割以上下回り、平年を2割近く下回った。 春作との入れ替わりにより中旬以降に価格を上げ、前年、平年ともかなりの程度上回った。
	キャベツ類 	愛知産を中心に神奈川県、千葉県産の入荷となった。愛知産の作付面積は前年並みで、停滞していた生育は気温の上昇に伴い回復した。神奈川県産の作付面積は前年並みで、干ばつによる生育停滞から、2月下旬以降の気温上昇に伴い回復した。千葉県産の作付面積は前年並みで、病虫害は少なく順調。総入荷量は前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は月間を通して大きな動きはなく、高めに推移した前年を2割以上下回り、平年を1割近く下回った。
	ほうれんそう 	茨城産、群馬産を中心に関東産の入荷となった。各産地とも作付面積は前年並みで、生育もおおむね順調であったが、低温・乾燥の影響により露地作を中心に葉の傷みが散見された。総入荷量は多かつた前年をやや下回り、平年をわずかに上回った。 価格は中旬に落ち着きを見せたものの、露地物が減少してハウス物中心となったため、前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。
	ねぎ 	千葉県産を中心に茨城産、埼玉県産など関東産中心の入荷となった。各産地とも作付面積は前年並みだが、茨城産は前年をやや上回る。低温・干ばつにより生育は緩慢であったが、各産地とも順調。病虫害の発生が散見されたものの、太りもよく作柄は良好。総入荷量は前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。 価格は、潤沢な入荷と2月下旬以降の気温の上昇により非常に苦しい販売が続く、やや安めに推移した前年を3割近く下回り、平年を3割近く下回った。
	レタス類 	茨城産を中心に静岡県産などの入荷となった。茨城産の作付面積は一部で前年をやや下回る。低温・干ばつにより生育遅延から一転、気温が高めに推移したことから、やや前進傾向となっている。静岡県産の作付面積は前年並みで、やや干ばつ傾向も、気温が比較的高めに推移したことから生育は回復している。総入荷量は少なめに推移した前年並み、平年をかなりの程度下回った。 価格は、数量が十分であったことから下旬に向けて軟調となり、大幅に高かつた前年をやや下回り、平年を2割近く上回った。
果菜類	きゅうり 	群馬産、宮崎産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、一部産地で低温・乾燥の影響により遅延が見られた。宮崎産の作付面積は前年並みで、低温の影響により一部草勢の低下が見られたものの、生育はおおむね順調。総入荷量は前年、平年とも1割近く下回った。 中旬以降に入荷増となり、価格は落ち着きを見せたものの、安めに推移した前年を2割以上上回り、平年を1割弱上回った。
	なす 	高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、曇雨天が少なく生育は順調で、着果数が増えるも病虫害の被害が散見された。総入荷量は前年をわずかに下回り、平年をわずかに上回った。 価格は中旬以降落ち着き、やや安めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上下回った。
	トマト 	熊本産、栃木産を中心に愛知産などの入荷となった。熊本の作付面積は前年並みで、年内の日照時間、1月以降の低温や曇雨天の影響により生育はおおむね順調も、着果のばらつきが見られた。栃木産の作付面積は前年並みで、8月下旬に定植したものと、促成作型のものともに生育はおおむね順調。一部で病害の発生が散見されるも軽微。愛知産の作付面積は前年並みで、低温により一部産地で生育が遅延している。総入荷量は燃油高などの影響もあり、少なめに推移した前年を1割以上下回り、平年を1割以上下回った。 価格は小玉傾向であった上中旬から下旬にかけて回復し、やや安めに推移した前年を1割以上上回り、平年を1割強上回った。

	ピーマン 	茨城産、宮崎産を中心に高知産、鹿児島産などの入荷があった。茨城産の作付けは前年をやや下回り、低温による生育遅延から回復しておおむね順調。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調。高知産の作付面積は前年並みで、一部低温の影響により草勢の低下が見られたものの、生育はおおむね順調。鹿児島産の作付面積は前年並みで、低温の影響があるものの、生育はおおむね順調。総入荷量は前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。 価格は前月の高値が残った上旬から下旬にかけて下がり、前年、平年とも1割以上上回った。
土物類	さといも 	埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了している。天候に恵まれ大玉傾向。年内出荷の比率が高く、残量自体は多くはない。次年度の植え付けはほぼ終了している。中国産の輸入は少なく、前年の3割程度となっている。総入荷量は前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。 価格は安めに推移した前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。
	ばれいしょ 	北海道産を中心に鹿児島産の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了し貯蔵ものからの出荷となった。夏場の豪雨の影響とその後の曇天・干ばつにより、品質にばらつきが見られる。鹿児島産の作付面積は前年並みで、積雪や低温の影響による茎や葉の枯れや、降雨の影響による定植遅れのため、生育は遅延した。多湿による病害の発生や突風による茎や葉の損傷が見られた。総入荷量はやや少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上下回った。 価格は大幅に高かった前年を3割以上下回り、平年を1割弱下回った。
	たまねぎ 	北海道産を中心に静岡産の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了し貯蔵ものからの出荷となった。夏場の天候の影響を受けた地域はあるものの、全体としては作柄良好で肥大も良好。静岡産の作付面積は前年並みで、年内からの干ばつや1月の低温により生育は抑制されているものの、作柄自体はおおむね順調。一部病虫害が散見されている。中国産の輸入は前年の3割以下となっている。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年を1割近く下回った。 価格は大幅に高かった前年を4割以上下回り、平年をやや上回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万6547トン、前年同月比101.8%、

価格は1キログラム当たり237円、同93.3%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(3月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	36,547	101.8	95.0	237	93.3	106.0	238	240	233
だいこん	2,452	104.7	92.5	83	80.6	96.7	88	83	79
にんじん	2,172	96.9	94.5	146	146.0	95.3	131	145	165
はくさい	3,504	106.2	98.6	90	107.1	111.3	78	94	99
キャベツ類	5,846	109.8	105.3	76	73.1	93.4	80	77	72
ほうれんそう	450	78.0	81.5	446	114.4	117.4	469	418	451
ねぎ	883	104.8	103.9	329	79.5	90.2	375	305	308
レタス類	1,300	115.1	86.2	207	94.1	125.3	259	201	174
きゅうり	1,378	94.2	101.9	333	117.7	108.5	379	317	308
なす	806	106.3	123.3	361	99.2	91.9	392	347	349
トマト	1,431	87.3	93.4	421	117.3	114.5	387	410	465
ピーマン	453	109.3	102.6	704	116.9	119.4	792	742	610
さといも	75	100.8	97.0	261	94.6	92.2	262	263	257
ばれいしょ	2,991	84.4	89.9	150	73.5	91.4	136	143	184
たまねぎ	5,187	140.6	101.3	124	51.9	101.7	126	126	121

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	3月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>鹿児島産を中心として、長崎産、徳島産、香川産などの入荷があった。冬産地の和歌山産は上旬で切り上がり、徳島産も中旬以降に減少した。ピークの鹿児島産も旬を追うごとに減少し、月間では前年をかなり下回った。長崎産は出遅れから伸び悩み、旬を追うごとに増加傾向も、月間では前年をかなり下回った。月間全体では前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>気温高の影響もあり、品質の悪いものが多く見受けられ、単価も伸びず安値推移となった。月間全体では前年を大幅に下回り、平年をやや下回った。</p>
	にんじん 	<p>鹿児島産と後続の徳島産主体の入荷であった。鹿児島産は中旬をピークに、下旬には終盤に入って減少。徳島産はやや出遅れ気味から中旬以降は増加し、月間では前年を大幅に上回った。しかし月間全体では前年、平年ともやや下回った。</p> <p>価格は、後続産地の入荷増に伴って旬を追うごとに上伸し、月間では安かった前年を大幅に上回り、平年をやや下回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>長崎産を中心として、福岡産、茨城産、熊本産、愛知産などの入荷があった。上旬から中旬にかけては九州産地の減反により出荷量が少なく伸び悩んだが、中旬以降に急激な気温高となったことにより各産地で生育が進み、入荷増となった。後続の茨城産の春物も前進出荷となった。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>九州産地の減反の影響により品不足感もあり、高値推移となった。茨城産は前進出荷の影響で前年と比べると単価安となった。全体では旬を追うごとに上伸を続け、月間では前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	キャベツ類 	<p>寒玉キャベツ、春キャベツとも愛知産を中心とする入荷であった。寒玉キャベツは主力の大阪産や和歌山産など、春キャベツは和歌山産や兵庫産などの入荷もあった。気温高の影響により各産地とも生育良好で出荷量も多く、下旬には降雨の影響もあり大玉傾向となって急増し、下旬の全体の入荷量は前年の1.8倍にもなった。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は、入荷量が多かったことと大玉傾向の影響により安値となり、旬を追うごとに下落した。月間では前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>福岡産と徳島産主体の入荷であった。気温高により前進出荷となったため、各産地とも入荷は減少した。福岡産の上旬は前年の半分以下であったが、旬を追うごとに徐々に回復傾向となったものの、月間では前年を大幅に下回った。徳島産は中旬に減少し、下旬には回復傾向となったものの、月間では前年をかなり下回った。全体でも前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>不足感から全旬を通じて単価高で推移した。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	ねぎ（白ねぎ） 	<p>群馬産と鳥取産主体の入荷であった。各産地とも天候の悪い日が多く、掘り取りが進まなかったため、産地出荷量が少なく入荷量が減少した。群馬産は中旬に落ち込んだが下旬には回復傾向となり、月間では前年をやや下回った。鳥取産は旬を追うごとに減少となり、月間では前年をかなり下回った。月間全体では前年を上回った。</p> <p>価格は需要期を外れて伸び悩んだ。入荷量が少ない中でも安値推移となり、月間では前年をかなり下回った。</p>
	ねぎ（青ねぎ） 	<p>徳島産が中心となり、高知産や近隣の大阪産、奈良産などの入荷があった。気温高で前進出荷気味であったことと悪天候の影響により、産地出荷量が少なかった時期があり、全体的に入荷量は伸び悩んだ。</p> <p>末端の荷動きは鈍く、価格は安値推移となった。</p>

	 <p>レタス類</p>	<p>ラップ物は兵庫産を中心に徳島産や香川産なども主体となった。裸物は長崎産が中心となった。悪天候により入荷が少なかったが、天候回復によって回復傾向となり、ラップ物は旬を追うごとに増加した。サニーレタスとリーフレタスも、玉レタス同様、悪天候により入荷が少なかったが天候回復によって回復傾向となった。レタス類全体では月間で前年をかなり大きく上回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>ラップ物は量販店の特売需要が多く、引合いが強いことから高値スタートとなったが、入荷増に伴って旬を追うごとに下落傾向となった。サニーレタスとリーフレタスも旬を追うごとに下落傾向で、全体では前年をやや下回り、平年を大幅に上回った。</p>
果菜類	 <p>きゅうり</p>	<p>宮崎産を中心として高知産や徳島産の入荷があった。悪天候の影響により各産地とも入荷量は伸び悩んだ。宮崎産は旬を追うごとに増加傾向ではあったものの、思ったよりも伸びず月間では前年をかなり下回った。月間全体でも前年をやや下回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>不足感から単価高となったが、引き合いも良くなかったことにより販売には苦戦した。旬を追うごとに価格は下落傾向であったが、月間では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	 <p>なす</p>	<p>千両系は高知産が中心となり、長茄子は福岡産と熊本産が主体となった。2月の天候不順の影響により、上旬の入荷量は伸び悩んだが、徐々に回復傾向となった。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。</p> <p>末端の荷動きが悪く価格は伸び悩んだ。中旬以降に下落して安値推移となった。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	 <p>トマト</p>	<p>愛知産と熊本産が主体となり、福岡産の入荷もあった。月の前半は大玉傾向から入荷量は多く、気温高もあり前進出荷気味となった。そのため月の後半に減少した時期があった。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>春の特売需要が多く、引き合いが強かったため高値となり、月の後半には不足感が生まれたことから、旬を追うごとに上伸傾向となった。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	 <p>ピーマン</p>	<p>宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。前月の天候不順の影響により着果状態が悪く、気温高の割には月の前半は入荷量が伸びなかった。下旬には増加し、月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、前月からの高値の影響や、月の前半に入荷量が伸びなかったことにより上中旬は高値推移となったが、旬を追うごとに下落傾向となった。月間では前年、平年とも大幅に上回った。</p>
土物類	 <p>さといも</p>	<p>愛媛産が中心の入荷であった。出荷終盤で産地残量も少なく、出荷量が少ない上に発注も少なく、入荷量は減少した。引き合いが弱く、輸入の中国産の入荷もほとんどなかった。月間全体では前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。</p> <p>量販店、業務筋共に引き合いは弱く、価格も安値推移となった。月間では前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	 <p>ばれいしょ</p>	<p>丸芋は新ものの鹿児島産を中心に北海道産の残量入荷もあった。北海道産は終盤となり、気温高の影響により発芽などの問題が多く、品質低下から入荷量は少なかった。鹿児島産は離島ものが天候不順により掘り取りが進まず、上中旬は極端に少なかった。下旬には回復傾向となったが、月間では前年の半分程度の入荷量にとどまった。メークインは北海道産を中心とする入荷で、残量は多く順調な出荷となったが、気温高から発芽などの問題が多く発生し、仲卸業者の買い控えが見られた。ばれいしょ全体では月間では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>丸芋、メークイン共に北海道産の品質低下の影響により単価安となり、特にメークインが仲卸業者の買い控えの影響で極端な安値となった。鹿児島産も上中旬は伸び悩み、下旬に上伸となるも月間では前年をやや下回る価格にとどまった。全体では前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	 <p>たまねぎ</p>	<p>北海道産の残量入荷と長崎産の新物が主体となった。北海道産は残量が多く順調な出荷を続け、月間では前年を大幅に上回った。長崎産も順調な入荷を続け、月間では前年を大幅に上回った。全体では極端に少なかった前年を大幅に上回り、平年並みとなった。</p> <p>価格は順調な入荷で安定した推移となったが、極端な品不足により高値だった前年を大幅に下回り、平年をわずかに上回った。</p>

(執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした5月の見直し

1～2月の寒さが厳しく、秋冬野菜は一部産地では萎立ちの発生もあるなど豊作でなく、切り上がりが早まった。一方、4月からの春野菜は3月の気温高と適度な降雨により、前倒し気味の入荷となった。市場価格は全般に平年並みであったが、消費者には各野菜とも値頃感があった。小売りでは、食品全般が値上がりする中で、生鮮品の価格を抑えながら販売するといった努力が見られる。

5月には初夏物も始まってくるが、引き続き前進傾向と報告されている。果菜類も越冬作を中心に気温の変動が大きい中で、生産者の努力により引き続き大幅な減少もなくピークを迎えるが、豊作ではない。市場側としては3月までの価格を維持し、集荷に努力したいところである。

根菜類



だいこんは、千葉産は4月いっぱいピークが続き、5月に入り徐々に減りながら推移すると予想される。気温の上昇により2Lの比率が徐々に高まり、採り遅れも影響している。5月いっぱいではほとんど切り上がると予想される。青森産はトンネル物であり、定植作業は順調であった。雪解けが早かった分、作業の開始が早まり、出荷も例年の5月20日よりやや早まる見込みである。6月は露地物になり数量的に安定してくると予想される。

にんじんは、徳島産は4月がピークの前半であり、5月15日前後から徐々に減りながら推移すると予想される。春にんじんは3月が少なかったものの、平年並みかやや微増と予想される。冬の気温が平年並みで干ばつ気味であったことから、やや後ろにずれている。今後徐々にLサイズの比率が高まると予想される。静岡産は4月6日の取引から始まるが、前年よりも3日程度遅い。ピークは14日から4月いっぱい、5月に入り減りながら推移すると予想される。「ベータリッチ」については、前半はLサイズ中心であるが、後半は2L中心になると予想される。生産量は農家の減少により、前年の

90%程度と予想している。千葉の春夏にんじんは例年4月下旬後半から始まるが、播種時期に干ばつが続いたことによる蒔き遅れから、やや後ろにずれると予想される。特別ピークはなく、連休明けから増えてきて6月20日前後までの計画である。



葉茎菜類

キャベツは、愛知産の4月までは春キャベツで、5月からは夏キャベツとなり、4月以降の出荷量は3月の半分程度になると予想される。5月も横ばいで推移し出荷量は前年並みと予想される。茨城産は5月上旬から始まるが、例年よりやや早い。出荷のピークは5月下旬から6月と予想され、寒玉系品種で、作付けは前年並みである。千葉産の「初恋キャベツ」は天候に恵まれ生育は順調である。4月よりも増えて5月20日から6月10日頃がピークであるが、やや前進気味であり、作付けは前年並みである。

はくさいは、長野産は5月15日の週からの出荷となるが、生育は大変順調で例年より5～7日程度早いと予想している。作付けは前年の105～110%と増えている。

ほうれんそうは、埼玉産は高温と適度な降雨により前進出荷となっているが病気の報告はない。播種は順次行われており、5～6月と出荷は続くが、5月20日以降はえだまめの作業に忙しく急減すると予想される。岩手産は5月初めから出荷が始まるが、例年に比べるとやや早い。5月中旬に1回目のピークが来て、6月が最大のピークとなり、7月にはやや減ってくると予想される。作付けはやや減っている。群馬産の12月に播種した物は3月で終了し、次の作が4月中旬に増えて、連休頃から5月いっぱいピークになると予想される。露地作であり、生育は順調で前年並みの見込みである。

ねぎは、茨城産は気温が高く適度な降雨もあったことにより生育は順調で、太りも良好である。4月は計画を上回る微増を予想しているが、5月からの初夏ねぎも潤沢で同様のペースと予想される。7月20日過ぎには急減すると予想される。千葉産の5月20日までの春ねぎは、1～2月の低温が影響し、花芽の出るのが早く

4月下旬にはかなり減ってくると予想される。初夏ねぎは、5月の連休中明け早々に出荷開始できると予想される。4月下旬がやや少なめであるが、5月には例年通り潤沢なペースを維持できると予想される。

レタスは、茨城産の現状は、岩井地域は55%終わったところで、今後ピークの後半へ向かい、5月の連休明けが終盤である。結城地域は5月いっぱいピークが続くと予想される。現状は7日程度の前進で、切り上がりは早まる可能性もあろう。長野産は5月中旬に始まり、下旬から川上村の標高1200メートル地帯の物の出荷が始まると予想される。ピークは7~8月であり、現在の生育は順調で、例年並みの推移が予想される。群馬産は4月6日売りからスタートするが、例年に比べると10日程度早く、連休明けにピークに入ると予想される。現在は生育順調であるが、天気により増減も想定される。

果菜類



きゅうりは、埼玉産の現状は例年通りの出荷となっているが、4月10日頃から増えて5~6月がピークと予想される。作付けは前年並みで、5月の出荷量も前年並みを予想している。宮城産の現状は出荷が始まったところであり、高騰する燃料代の節約から定植を後ろにずらしたが、3月の好天により例年並みに追いついてきた。5月上旬に1回目のピークが来て、6月中旬に再びピークが来ると予想される。福島産は4月10日前後からとなるが、若干遅らせている。ハウス物のピークは6月中旬で、5月には徐々に増えながら推移すると予想される。生育は順調で、5月は前年並みを予想している。高知産は越冬物となり、当面のピークは5月末頃に来て、6月いっぱいの出荷を予想している。12月~翌1月の降雪や2~3月の日照不足が影響し、今年は前年の90%程度の出荷が続き不作であった。4月以降の回復を期待し、5月は前年並みを予想している。

なすは、高知産が4月に入り出荷のピークを迎えている。生育は順調で前年より多めの出荷が予想されており、新品種導入の効果が出てい

るとともに生産者も増えている。5月の連休頃に最も多く、6月中旬になって急減すると予想される。福岡産は3月の好天により生育は順調である。4月下旬から5月上旬がピークと予想され、5月としては前年並みを予想している。群馬産の現状は、ハウス物が始まっており、5月の連休頃から本格化すると予想される。このまま好天で推移すると、前年をやや上回ると予想される。6月10日頃には露地物が始まるが、作付けは増えている。

トマトは、福岡産の越冬物は4月末から連休にかけて増え、5月にピークを迎えると予想される。1~2月に降雪があり、3月には降雨の影響でカビ病が発生するなど万全の環境でなかった。それでも徐々に回復し、5月は前年を上回ると期待しているが、生産者が減少しているため、前年並みにとどまると予想される。「桃太郎ホープ」が70%を占め、MSサイズ中心とやや小ぶりである。熊本産は促成物であり、1月の低温もあって3月は減少した。現状、着果は問題なく、4~5月は回復して、MSサイズ中心の小玉傾向と予想される。出荷は7月に入り急減すると予想される。愛知産は3~4月がピークとなり、5月はピークの後半である。越冬物を中心に、1月定植の抑制物となるが、現状は順調である。中心品種の「かれん」はやや大玉傾向で、LMサイズ中心と予想される。出荷は6月いっぱいか7月上旬までと予想される。栃木産は越冬物と促成物の春トマトが半々と予想される。5月は促成物のピークで、越冬物は6月中旬がピークの見込み。昨年と異なる天候により、生産者の対応によって量にばらつきが出ている。病気が散見され、4~5月は平年を下回る出荷と予想される。

ピーマンは、茨城産は2月までは寒さとハウスの温度を十分に上げられなかった影響で肥大が遅れ、少なめの出荷になったが、3月にはようやく増えてきた。定植をやや後ろにずらした無加温ハウス物は4月末頃から本格化し、天気の回復もあって5月には前年並みの出荷と予想している。宮崎産は3月の天候不順の影響により4月10日前後から一時減少するが、20日後には回復してくると予想される。5月が最大のピークであるが、大きな増減はなく順調に入荷し、5月の最終週には減ってくると予想され

る。鹿児島産は前年10月から始まった冬春物が5月いっぱいの出荷と予想される。4月の初頃がピークで、5月は減りながら推移すると予想される。

土物類



ばれいしょは、長崎産のトンネル物は4月上旬から始まっているが、本格出荷は4月下旬から。早い物は1月24日前後の寒害の影響でやや少なめである。その後の天候の回復で、遅れを取り戻しつつあり、生産量は大きな減収にはならないと予想している。5月前半をピークに、6月に入り徐々に切り上がってくると予想される。静岡産の三方ヶ原男爵は例年よりやや早く、5月初め頃からと予想され、気象災害もなく生育は順調である。ピークは6月上中旬であるが、やや早まる可能性もある。中心サイズはLから2Lと予想される。

たまねぎは、兵庫産は4月いっぱい極早生、5月の連休明けからは早生になると予想される。極早生はLサイズ中心であったが、若干小玉傾向であった。早生からは平年並みの大きさに回復すると予想される。6月に中生と晩生となって全体のピークとなると予想される。天候に恵まれ生育は順調である。佐賀産の極早生は4月5日後に出荷が増えて、4月15～20日に早生に切り換わり、晩生は5月20日過ぎからと予想される。極早生、早生ともに肥大良好で、生産量は前年を上回ると予想される。

その他



アスパラガスは、長野産の現状は10日から2週間前倒し気味である。出荷は連休明けから始まり、ピークは5月中旬から6月上旬と予想される。本年は株が充実しており、前年を上回る出荷を予想している。

ブロッコリーは、埼玉産は例年3月末から4月初めは出荷の谷間になる時期である。現状は10日程前進出荷となり、前年同時期をかなり上回っている。5月は元々多くないが、今年は前進した分、連休頃から減り始めると予想され

る。茨城産の現状は秋冬物が終わったところである。すす病の発生があってやや不作であった。春ブロッコリーの出荷開始は5月に入ってから始まると予想され、作付けは前年並みである。

かぼちゃは、沖縄産の二期作物は4月下旬から始まり、5月いっぱい入荷と予想される。ほぼ例年並みで、「えびす」「栗五郎」はそれぞれ5玉、6玉中心で肥大も問題ない。茨城産は例年通り5月20日頃から始まるが、作付けは前年の90%と減っている。ピークは6月中旬で、品種は前年と変わらず「栗將軍」である。

スイートコーンは、宮崎産のハウス物は3月29日から出荷が始まっているが、露地物は例年より3～4日早めの5月10日頃からの出荷を予想している。品種は「ゴールドラッシュ」で、作付けは生産者の高齢化により若干減少している。6月いっぱい切り上がり、5月としては前年並みを予想している。

えだまめは、千葉産のハウス物は4月中旬からであるが、5月の連休中や連休明け頃から露地物に切り換わり、今のところ生育は順調である。埼玉産は2月末頃に定植したトンネル物は5月20日前後から始まり、生育は順調である。作付けは前年を上回っている。

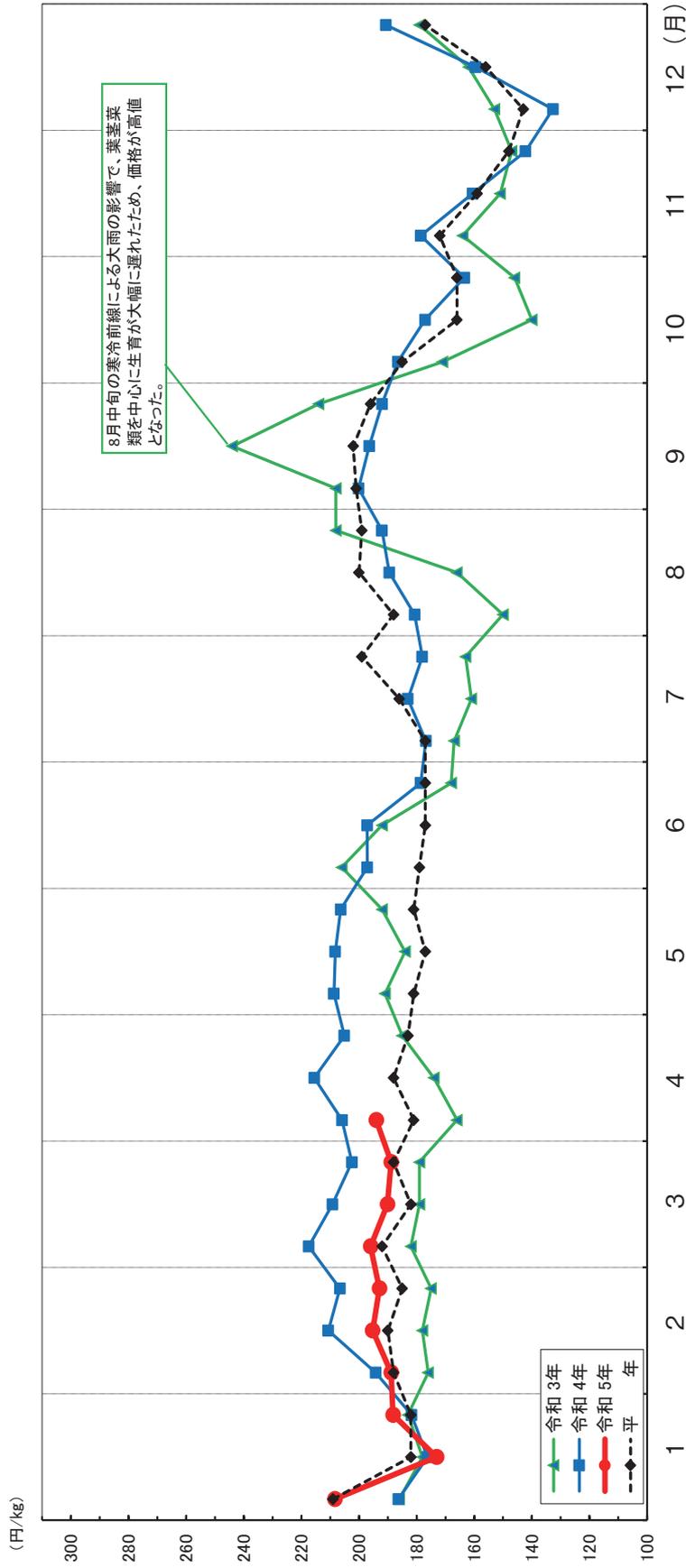
らっきょうは、鳥取産は例年より若干早く、5月20日頃から始まり、ピークは5月末頃に来て、6月10日頃までの出荷と予想される。葉の状態から判断すると、今年は平年並みと予想される。鹿児島産は例年並みに4月下旬から出荷が始まると予想される。当初の生育は遅れ気味であったが、天候に恵まれ回復してきた。5月上中旬がピークで6月上旬まで出荷は続き、5月としては前年を上回ると予想している。

すいかは、千葉産のハウス物は連休明けから始まるが、ほぼ例年と同様のペースである。ピークは5月下旬を予想している。トンネル物が始まるのは6月中旬と予想される。生産者の高齢化により、作付けは微減となっている。

(執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

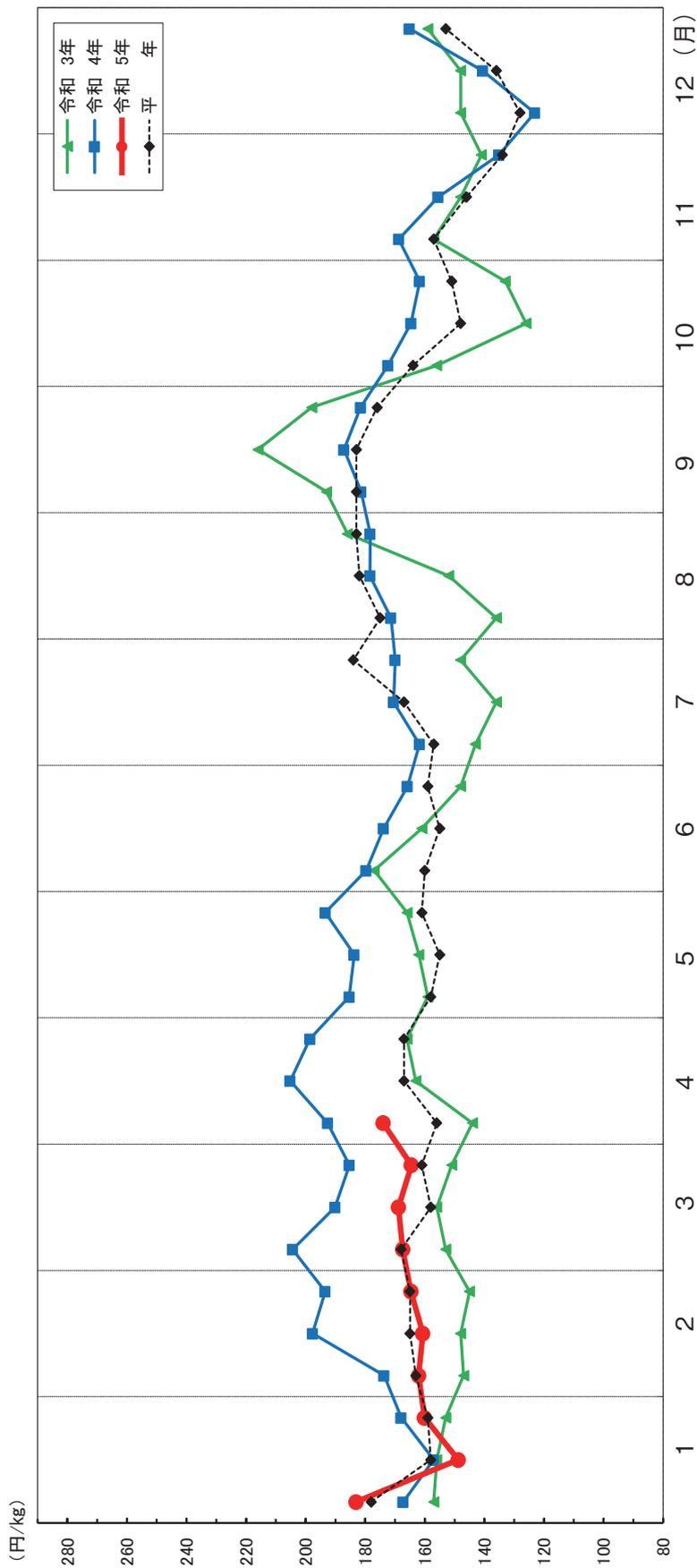
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月																
	上旬	中旬	下旬																																				
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179	
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191	
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194																													
平年	209	182	182	188	190	185	192	182	188	181	188	183	181	177	177	177	181	179	177	177	186	199	188	200	199	201	202	196	185	166	166	172	159	148	143	156	177		

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月												
	上旬	中旬	下旬																																
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159		
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165		
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174																									
平年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。